

# 牛飼いは詠み続ける――下川町の鈴木和夫さん

(家の光協会発行「家の光」北海道版 2013年5月号)

毎日が牛とともにある。そんな酪農家のごくありふれた日常を俳句に詠む牛飼いが、下川町にいる。

名寄川の上流部に広がる森林に囲まれ、冬場はぐんと冷え込む道北の下川町。鈴木和夫さん(51)の牧場は、市街地から雪道を車で5分ほど行った山あいにある。

鈴木さんは、酪農ヘルパーをするために妻の淳子さん(48)とともに移住し、新規就農を実現させた人。言葉をつくることに興味があり、5年前に俳句を始める。俳号は「牛後(ぎゅうご)」。毎日接する牛や周囲の風景、身近な生活を詠むことが多い。

「句になりそうなことがあると、作業中でもメモをとる。それをパソコンに打ち込んでおき、投稿するとき整理するんです。いつも頭の片隅には、俳句のことがありますね」

外の農作業がない冬場は、パソコンに向かう時間が長くなる。夫の姿を見守る淳子さんが、「わたしのやることに口出ししないので、とても楽ですよ」と言って笑う。

遠方の俳句仲間と情報交換する機会も増え、去年は俳句コンクールで受賞した。自然体で詠み続ける句には、酪農の魅力が織り込まれる。

## 牛飼いが性に合う酪農家への転身

小樽市で生まれ、オホーツク地区の美幌町で育った鈴木さんは、教員をめざして北海道教育大学旭川分校に進学。学生時代はワンダーフォーゲル部に所属し、部活の後輩だった大阪出身の淳子さんと出会う。

卒業と同時に結婚し、札幌市内の印刷会社に勤めた。夫婦で社会人の山岳会に入り、自然の中で休日を満喫するが、それは趣味の世界。田舎暮らしに憧れて北海道に渡った淳子さんに影響を受け、大地に足をつけた生活ができる農業の道を志すようになる。



子どもたちは独立し、牛やヤギ、犬、猫と暮らす鈴木さん夫婦

「酪農ヘルパーを募集」の新聞記事を見つけ、ホクレンの研修農場で学んだ。そして平成4年、下川町へ移り住んで酪農ヘルパーになり、町内の酪農家の牛舎を回る。

「わたしに合っていたんでしょうね。そのうち、自分で酪農をやったほうがおもしろいかなと考えました」「牛飼いらしい」し、経営コストも下げられるので、放牧酪農がやりたかった。そんななか、希望する条件に合う土地が見つかり、13年前に今の土地で新規就農が実現した。

初妊牛40頭から始め、現在70頭(うち経産牛は40頭)。借地も含め60ヘクタールの草地がある。鈴木牧場は傾斜地が多いが、山頂から下川の町が一望できる絶好のロケーション。春になると、放牧された牛たちが草を食む、美しい風景が広がる。

放牧酪農の知識を深めたり、他の酪農家たちとの情報交換で刺激をもらえると考え、道北地方の酪農家や大学の研究者、試験場職員らでつくる「天北放牧ネット」に参加し、運営委員も務めてきた。4人の子どもたちは全員独立し、今は夫婦で酪農経営を切り盛りする。

## 酪農家の視点から自然体で詠み続ける

5年前に俳句を始めたきっかけは、ブログをやりながら句集も出している獣医師、安田豆作さんに触発されたからだという。

「最初は、彼の上から読んでも下から読んでも同じ言葉になる回文俳句をまねして、自分の酪農ブログに載せていたんです。それを読んだ豆作さんが、褒めてくれたり、句集を送ってくれた。俳句はおもしろそうだなって思いましたね」

こう振り返る鈴木さんだが、その句友とはまだ会う機会がない。

身の回りのことはすべて俳句の題材になるが、仕事柄、牛飼いの生活にまつわるものが多い。

「静脈の青き乳房や春の水」は、牛の乳房に浮かび上がる青い血管と、搾ると温かい牛乳が出てくる情景を詠んだもの。牛の瞳に映る空模様で秋を悟り、放牧場を閉めて冬支度に入る季節の到来を詠んだ「牛の眼の空を湛えて牧閉す」など、毎日牛を間近で観察し、接していなければ考えられないものばかり。これらの句は、鈴木さんの牛への思いを表現している。

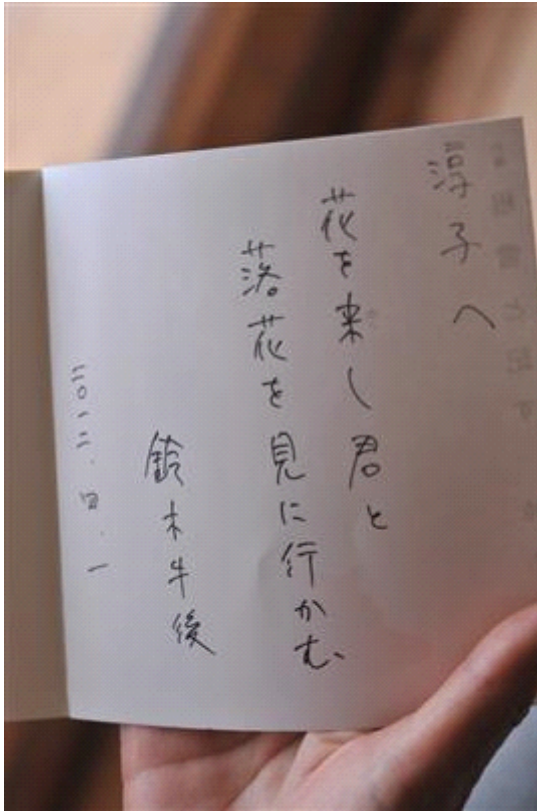
俳号は中国の故事成語「鶏口牛後(けいこうぎゅうご)」からとった。「大きな組織の末端(牛後)より、小さくても長(鶏口)となるほうがよい」という意味。実際には末端の人のほうがたいせつであることも多く、自身もそうありたいと考え、「牛後」としたという。

俳人・黒田杏子さん主宰の藍生(あおい)俳句会などに入会し、北海道の俳句をおもしろいものにしようとする集団「i t a k(イタック・アイヌ語で言葉の意味)」の幹事も務める。いずれも、酪農家のメンバーは鈴木さんだけらしい。

「自分を表現したいから、俳句をやっている感じかな。わたしの作った俳句や文章を読んで、『酪農の仕事が少しわかった』と言う人もいます。どんな反応でもうれしいですよ」

と、自然体で受け止めている。

昨年4月、愛媛県松山市で俳句に関わる企画・イベントや出版事業などを手がける会社が主催する、第1回「大人のための句集を作ろう！コンテスト」で鈴木さんの作品が最優秀賞に輝いた。受賞記念の句集『根雪と記す』も刊行されている。



妻の淳子さんのために詠んだ一句

「わたしのために別に一句作ってくれたのよ」と言って、妻の淳子さんが句集を見せてくれた。

「花を来し君と落花を見に行かむ」

サクラが咲くような春の時代をいっしょにすごしたきみと、花が落ちるような年になっても見に行こう……。そんな妻にたいする愛情を込めた句である。鈴木さんの真面目な人柄が、よく伝わってきた。

牛飼いを続けるなかで見つけた俳句の奥深い世界。「年を重ねてもできるから、ずっと続けていきますよ」と、メモを手に、今日もパソコンの画面に向かう。

※地元の菓子店「矢内菓子舗」では、鈴木牧場の生乳を使ったスイーツが人気。下川産のコムギと卵で作るシュークリーム（1個150円）。イチゴなどのようかん（1本330円）やプリン（1個260円～）も販売する。

住所／上川郡下川町錦町81

TEL：01655-4-2113 FAX：01655-4-2167